

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平の城郭研究15年

鳥取市教育委員会文化財課
文化財専門員 細田 隆博

はじめに

鳥取城跡内では、擬宝珠橋や中ノ御門の一部など江戸時代の城の正面玄関である大手登城路の復元が進む。この建造物復元を伴う保存整備事業の画期は、平成18年(2006)に史跡鳥取城跡保存整備基本計画が策定されたことにある。さらに翌年、鳥取市は同実施計画を策定し、当面取り組むべき事業を明確化した。この実施計画は、調査計画、利活用計画、大手登城路復元整備基本設計、保存管理実施方針という4つの計画等から構成されている。

一見して建造物復元に注目が集まりがちであるが、鳥取市が地道に取り組んできたのが調査計画の実施と公開であった。この成果として、本市は平成20年(2008)から『鳥取城調査研究年報』を刊行してきた。当時、こうした城郭に係る年報を公刊する事例は、国内に特別史跡肥前名護屋城跡、特別史跡姫路城跡、特別史跡安土城跡、史跡金沢城跡など数城しかなく、本市の取り組みは極めて先進的なものであった。そして、昨年度、発刊から15年を迎えて、多分野で大きな研究成果が発表してきた。

そこで本稿では、この15年の歩みを、特に近年その研究が急速に進化してきた城郭研究(縄張り研究)という観点で概観してみたい。

1. 鳥取城の城郭研究の歩み

最初に鳥取城調査研究年報の公刊以前の鳥取城の城郭研究の歩みについて、千田嘉博氏の主著『織豊系城郭の形成』(2000年、東京大学出版会)を参考にしつつ、4つに時期区分し振り返る。

①江戸時代

江戸時代も18世紀頃から博物学の流行を背景として、歴史研究として城郭研究がなされるようになる。

鳥取城の場合、当該期で特に著名なのは、鳥取城研究の嚆矢である鳥取藩士岡島正義(1784~1859)の一連の考察である。

鳥取藩の侍医小泉友賢(1622~1691)が編集した因幡国最古の地誌・歴史書の『因幡民談記』の記載とともに、岡島は文政12年(1829)に成立したとされる『鳥府志』で、近世城郭およびその城下の構造的変遷に係る考察を行っている。すなわち、近世城郭としての鳥取城の大手門は始め北ノ御門にあり、池田長吉の改築によって、中ノ御門を大手門として、現存する天球丸や二ノ丸などの曲輪が築かれたという説である。また城下も北ノ御門前を中心とし、南東方向に拡張されるという。この説は長く鳥取城の定説的な解釈として無批判に採用されていくことになる。

一方、岡島は鳥取城を語る上で欠くことができない歴史的に著名な羽柴秀吉の兵糧攻めに際して、羽柴方が築いた陣城群を7区分し、詳細な踏査記録『旧墨鑿覽』を記した。当書には、測量に基づく各陣城の鳥瞰図などが記されているほか、自らの踏査とその記録が不十分であることを認め、「後哲予が不及所ヲ修補メ古往ノ形勢ヲ詳ニ辨セバ恐クハ藩城保護ノ微益トモナリナン歟ト本ヨリ懇願スル所也矣」と、より客観的で正確な遺構把握が、それらの保護に繋がることを指摘している。今日文化財保護の仕組みで一般的な遺跡保護に備えた正確な調査の重要性を、今から160年以上前の鳥取藩士が指摘している点は高く評価されるべきである。また、前述した『鳥府志』では、太閤ヶ平及び周辺の遺構について「稀有の旧蹟なれば、兵道に志あらん人は必経過して其構営を熟覧有るべし」と今日でいう城郭研究を志す者の來訪を促している。

②明治時代から第2次世界大戦期

明治時代から第2次世界大戦期にかけては帝国陸

軍によって城郭研究が行われた時期である。

鳥取城では昭和9年(1934)に陸軍省が本邦築城史編纂のために現地調査を行っている。この調査では鳥取城全域の平面図が作成されているが、主要部分の断面図も作成されている。このうち、昭和18年(1943)の鳥取地震で崩落してしまい現在では確認できない天守台北西部の巻石垣についても平面図と断面図が掲載され、その規模を概ね理解することができる。また、この巻石垣について「(前略)其の前方に半円形の突出部を設けあり是れ天守閣基脚部を倒防する設備ならんか」と記し、その機能を考察している点は特筆される。

③戦後から1980年代

第2次世界大戦によって焦土と化した日本において各地で空襲によって失われた天守を復興しようとする動きが起こるとともに、歴史ブームを背景に昭和33年(1958)に日本城郭協会が設立されるなど、各地で城郭研究団体が結成された。このような背景の中、民間学としての城郭研究が国内で取り組まれていく。

鳥取城においては、山根幸恵(1923~2002)が昭和41年(1966)に『鳥取城』(鳥取城刊行会)を刊行する。先に記した岡島正義の考察を基本としながら、鳥取城の歴史やその価値について、わかりやすく概説した著作である。彼が画期的であったのは、当時、城内に残されていた刻印石を分析し、それまで、江戸時代の地誌などであまり注目されて来なかった鳥取時代の池田光政による城郭普請の関与について言及した点であった。当時、鳥取城の現存遺構のほぼ全ては、関ヶ原合戦後にに入った池田長吉が構築したと信じられていた中で、新しい見解がこの時提示されたのである。

また、吉田浅雄(1924~2013)は、昭和58年(1983)に『戦国城砦 久松山鳥取城跡之圖』を発表し、久松山全体に占地した鳥取城全域の縄張図を作成した。それまで網羅的に把握されていなかった、主に山腹に残る中世城郭に遡る遺構の所在をも明らかにした。また、そればかりでなく、後に登石垣と評価される遺構の存在などの表面観察から確認できうる成果も詳らかにしている。

一方で、太閤ヶ平についても、吉田はすぐれた踏査成果を発表した。彼は、岡島正義の『旧墨鑿覽』を基礎として、鳥取城及びその周囲に広がる陣城群を独力で丹念に測量し、正確な縄張図を作成した。この成果は、昭和60年(1985)に『秀吉鳥取城攻略の本陣及び付近遺構要図』『秀吉之天正鳥取陣営』として発表され、全国の城郭研究者の知るところとなり、鳥取城跡とその周辺の学術的価値は高まった。彼はその他にも鳥取県及び周辺地域の城郭調査を実施しており、その業績は我が国の城郭研究史上における代表的なものとして、前述した千田嘉博氏の主著『織豊系城郭の形成』内にも明記されている。

④1980年代以降

この時期は、城郭研究、文献史学、考古学の協業への嚆矢が芽生える時期である。この背景には、第1回全国城郭研究者セミナーが始まり、城郭研究の課題が全国的に共有され、研究が進展していくことや、各地で行われる城郭遺構を対象とした発掘調査が実施されるようになったという背景が大きく影響している。鳥取城跡の場合もこの頃、石垣修理に伴う発掘調査が始まる。

鳥取城跡の石垣は、昭和18年(1943)の鳥取地震によって崩落16ヶ所、半壊8ヶ所という甚大な被害を受けていたが、被災後、修理は未着手のままであった。ようやく修理が開始されたのは、昭和32年(1957)の史跡指定後、昭和34年度からであった。最初の発掘調査は、昭和55年(1980)と翌年実施された二ノ丸走櫓石垣修理に伴い滅失する上面遺構の記録保存のための調査である。この調査では、絵図に残された建物の礎石やその抜き取り痕跡を検出している。また、昭和55年には、日本で初めて修理対象石垣の記録保存を前提とした写真測量が実施されたことも我が国の文化財石垣修理の歴史では画期的な出来事であった。

さらに、平成2~3年(1990~91)天球丸石垣修理においては、修理に伴い滅失する上面遺構の記録保存のための調査以外にも、解体する石垣の内部構造を把握する調査などが実施された。この過程で、現状の曲輪内から未知の石段などが発見された。石段の構築時期については遺物の検討から16世紀末から

17世紀前葉と推定されており、現存遺構が関ヶ原合戦直後に池田長吉によって築かれたという通説に再考を迫る調査成果が得られた。

2. 鳥取城の城郭研究15年

『鳥取城調査研究年報』が刊行されて以降の15年は、江戸時代における政治的配慮のもとで記された地誌などの矛盾を丁寧にあぶり出し、より確かな史資料に基づく調査研究が行われた。この結果、特に全国的な視点と各分野の協業による鳥取城ならびに太閤ヶ平の再評価が進んだ。

①鳥取城について

平成20年(2008)に公刊された『鳥取城調査研究年報1』の中で、西尾孝昌は「久松山の調査について」と題して、吉田浅雄が行った以来の山上ノ丸と中腹の遺構について踏査による調査成果を発表した。

特に注目すべきは、関ヶ原合戦直後に城主となる池田長吉が構築したと考えられていた山上ノ丸の大部分は、その前段階の宮部氏の遺構であると指摘した点である。

このうち、天守台にはいくつかの改修痕跡があることは知られていたが、その部位が本丸のかつての搦め手虎口であった可能性があることを指摘した。また、山上ノ丸に所在する登石垣について、中国地方で初めて登石垣であることを確認し、倭城との関連性の中で鳥取城を評価した。登石垣とは斜面地に豎方向に構えられた石垣のことで、敵の斜面移動を封鎖する目的で築かれたものである。その導入は、豊臣秀吉による朝鮮出兵である文禄・慶長の役の際に、秀吉軍が朝鮮半島南岸に築いた倭城が起因となるという。

さらに、山上ノ丸南側斜面に見られる段状遺構については、それまで兵糧攻め時の籠城衆の所在地と推定されていたが、矢穴痕のある転石が多数見つかったことから、石取場であることを指摘した。

山上ノ丸の大部分が宮部期の遺構であるという西尾の説をさらに補強する説を提唱したのが谷本進である。谷本は、平成21年(2009)公刊の『鳥取城調査研究年報2』において、「鳥取城山上ノ丸の構造と

形態」と題して論考を発表し、鳥取城山上ノ丸と若桜鬼ヶ城の構造と形態が高い共通性があることを明らかにした。それゆえ、鳥取城主の宮部長熙の支援で与力大名であった木下重賢が若桜鬼ヶ城の整備を推進したという。また、因幡における政治拠点としての鳥取城と境目の城である軍事拠点としての若桜鬼ヶ城の関係性は、但馬における出石有子山城と但馬竹田城、阿波淡路における徳島城と洲本城と共通し、それらが城郭構造の精粗に反映していることを指摘し、鳥取城と若桜鬼ヶ城は、出石有子山城と但馬竹田城などとともに豊臣期大坂城の支城網として役割があったことを提唱された。また、谷本は、令和4年(2022)に山名氏城跡保存会が発行した『但馬の大名と出石城の石垣』の中で、但馬・因幡・播磨という地域が、天正8、9年(1580、81)頃に羽柴秀吉及びその一族が織田信長から拝領した“最初の国”という歴史的位置づけを明示されており、これまで、注目されてこなかった豊臣期の鳥取城を考えるうえで、極めて重要な背景を提示された。

一方、山麓部の遺構の再評価に取り組んだのが、筆者である。筆者は、平成22年(2010)に公刊した『鳥取城調査研究年報3』において、「鳥取城の通説を疑う～池田長吉現存遺構構築説を再考する～」と題した論考を発表。前述した平成2～3年(1990～91)の天球丸石垣修理における解体時調査を再検証し、曲輪内から発見された未知の石段を埋設する現存曲輪の造成土中から、周辺地域で慶長20年(1615)の大坂夏の陣以後に出土するという砂目積みの肥前陶器皿が出土している点などに注目し、少なくとも現存する天球丸を池田長吉が構築したという説を否定した上で、池田光政が將軍秀忠に見せた城と城下の普請計画図である『因幡國鳥取絵図』(岡山大学附属図書館蔵)や、二ノ丸三階櫓の建築様式は層塔型であり、その初現は池田長吉が城を改築した後の慶長13年(1608)以後とされることなどから、鳥取城の山麓の基本的な姿は、池田長吉父子の後に鳥取城へ入った池田光政が、鳥取藩32万石の居城として整備したという説を提示した。

②太閤ヶ平について

太閤ヶ平の遺構自体の破格な構造は、多くの研究

者に知られていたものの、後の太閤となる秀吉が在陣したことから太閤ヶ平と命名されているように、秀吉の陣という以外に解釈されることはなかった。それに異論を唱えたが西尾孝昌である。彼は平成21年(2009)公刊『鳥取城調査研究年報2』の「鳥取城の城郭遺構確認調査について」の中で、太閤ヶ平は、毛利と一大決戦を想定した鳥取城包囲の本陣とうい性格だけでなく、織田信長出陣を前提として築かれたものだという説を提示した。さらに西尾は、この後、『信長公記』内で太閤ヶ平を示した「大將軍の居城」との表記に注目。それまで、「秀吉の居城」と訳された「大將軍の居城」について、「大將軍」は当時の信長の尊称であるとして「信長の居城」であると結論。この新説が研究者間に広く認識されていくきっかけとなつたやりとりは、中井均氏の『信長と家臣団の城』(2020、角川選書)に収録されている。

また、西尾説を受けて谷本進は、平成24年(2012)公刊『鳥取城調査研究年報5』で「鳥取城攻め太閤ヶ平本陣群の検討」を発表した。羽柴秀吉の中国攻めにおける各合戦の秀吉本陣を比較検討し、破格の規模を誇る太閤ヶ平は、毛利家を討ち果たして西日本を統一する織田信長の意思を具現化したものと評価した。

3. これからの中取城研究

これまで述べてきたように、鳥取城の城郭研究は大きな成果を残した。その成果の一部として、令和4年(2022)4月に地元鳥取の研究者などが分担執筆し中井均氏が編集した『鳥取城』(ハーベスト出版)が新しい概説書として刊行されたことは意義深いことである。

近世城郭としての鳥取城は、かつては慶長の築城ラッシュ期に整備された城郭の一つと理解されていたが、現在では、織豊期以降、段階的に整備され、鳥取藩32万石の居城として元和期以降に大々的に整備されていった様相がおぼろげながら明らかにされてきた。また、太閤ヶ平については幻の織田信長出陣の遺構として理解されるようになった。

一方で、城郭研究の進める上で、各遺構の年代観

を特定する手法として、出土する遺物の調査も大いに進んだ。坂田邦彦は、令和元年(2019)、『鳥取城調査研究年報12』において「鳥取城の瓦—17世紀を中心の一」を発表した。その後、18世紀以降の状況の研究も進めており、今後の成果に期待したい。

さて、ここでは、これまでの研究で不足と思われる視点や領域について筆者の思うところを述べたい。

まず、どの城郭もそうであるが、城郭を語る上で、城郭の地政学的な意味を様々な観点から明らかにすることが必要である。そもそも鳥取が所在した因幡国は、古代以来の行政区域である山陰道における距離的な中間地であるし、畿内を中心とした権力構造を考えた場合、畿内を安定的に維持するために必要な領域縁辺部にあたる。羽柴秀吉の鳥取城を巡る戦いや、姫路城や岡山城ともに鳥取城主を担った池田家による統治など、こうした地政学的な意味によるところが大きいところは忘れてはならない視点である。

また、鳥取城の城郭構造の変遷は、おぼろげながら大まかな状況は言葉の上で明らかにされてきたが、その具体像は提示できないままとなっている。限定的ではあるが、城内外で行われた発掘調査や地質調査に基づく新しい城郭や城下の様相を将来的には具体的に提示していくことも必要であろう。こうした課題がある中、令和2年(2020)に中ノ御門表門の南鏡柱礎石下から出土した未知の便槽や未知の焼土層の発見は、これまでの鳥取城を考える上で貴重な発見となった。中ノ御門は池田光政が大手門として創建したもので、その前段の池田長吉父子期も虎口として機能していた蓋然性が高いものの、それ以前に相当する層位で、便槽が発見された意味は、当時この場所は、城の出入口でなかったことを示す。織豊期の鳥取城の範囲や城下の在り様を考える上で重要な発見であった。また、より具体的に城の構造を理解する上では、現地に残る石垣の調査研究も不十分である。特徴的な石垣である巻石垣等の実態解明も道半ばといえる。

さらに、鳥取城では復元を進める大手登城路内の門などについて復元案作成にいたる考察は進んだものの、鳥取城内の建築的な研究も鳥取城の特性を理

解する上で進めていくべきである。

例えば、鳥取城の天守は、そもそも宮部期に創建されたものを池田光政期に二層に減築したと考えられる。宮部期の創建であれば、初期天主の系譜に位置づけることが可能であり、例えば、明智光秀創建の周山城跡(京都市右京区京北)の天主などとの比較も視野にする必要がある。初期天主は御殿的要素を持っており、その屋根は、瓦葺きでなく柿葺きなどが想定されている。鳥取城の天守も池田光政が二階へ減築した際に、柿葺きで葺かれたと考えられている。一方で、柿葺きの天守があった山上ノ丸では、天守と山麓から見える出丸の櫓が柿葺きでそれ以外が瓦葺きであり、創建当初から柿葺きであったのかどうかも含めて、柿葺きが持つ意味を今後考えていきたい。

山麓に目を向ければ、城内には二つの三階櫓が建っていた。一つは二ノ丸三階櫓で、落雷による天守焼失後、事実上城の天守の役割を担うが、三層三階の櫓としては国内最大級であり、このような視点はこれまで見過ごされがちであった。また、天球丸の三階櫓は、層塔型の二ノ丸三階櫓を異なり、二重の多間櫓上に望楼を載せた形態であった。それは、岡山城の大納戸櫓を彷彿とするもので、なぜ、そのような櫓が二ノ丸よりも高台にある天球丸に創建されたのか、城主との関連性など興味が尽きない。さらに鳥取城は歴史的経緯から大規模の天守を頂かないが、城の規模を示す要素として天守に代わる指標になっていくのが、城の宮殿化を示す御殿の存在である。鳥取城は幕末に至ると、二ノ丸御殿、三ノ丸御殿、扇御殿という3つの巨大御殿が城内に建ち並んでいた。それに付随する庭園や宗教施設の在り方など、これまで注目されてこなかった要素の研究も求められる。

一方、太閤ヶ平については、谷本が検討したように同時期の秀吉本陣との比較はなされたが、それ以上の研究が進化しているとは言い難い。筆者は、太閤ヶ平は、後に秀吉が築く石垣山城(神奈川県小田原市)や、肥前名古屋城(佐賀県唐津市)、さらには機張城(大韓民国釜山広域市)の中権域の祖形と位置づけるている。石垣山城や肥前名護屋城の縄張り

は黒田官兵衛(孝高・如水)が担ったとされ、現存する機張城は、文禄・慶長の役に際して、官兵衛の息子、長政が築いたものであり、これらの関連性から太閤ヶ平の縄張りは、黒田官兵衛の手によるものとの推定したいところであるが、これが妥当かどうか今後のさらなる検討が待たれる。いずれにせよ、太閤ヶ平は、当時の政権が担う戦闘の形態を如術に示す代表的事例として、世界史的な検討の中で人類の顕著な普遍的価値を確立しうる重要な遺構であることは間違いない、こうした観点での研究も追及してもよいであろう。

おわりに

本稿が掲載された『鳥取城調査研究年報』は本号で17号を数える。近年はこれまであまり注目されてこなかった樹木にも焦点をあてた論考が掲載されており、鳥取城研究の進化を示す好例といえる。今後、こうした分野も含め、鳥取城や太閤ヶ平の本質的価値を明らかにするためにも、この年報が末永く公刊され、鳥取城の研究が、我が国における城郭の研究の一助となり続けることを期待したい。

なお、本稿は、鳥取地域史研究会が令和5年(2023)2月12日に鳥取県立博物館で実施した記念講演『鳥取城研究の15年』において筆者が発表した内容をまとめたものである。

参考文献

鳥取市教育委員会

1987 『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理概要報告書』

鳥取市教育委員会

1997 『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書』